

## 怖い絵

中村 龍介

先日、上野の森美術館に評判の『怖い絵展』を観に行った。元来、美術展なるものにはそれほど興味はないのだが、文芸春秋誌の巻頭グラビアに毎月掲載される、中野京子さんの『名画が語る西洋史』の内容がとても面白く、愛読している。その中野京子さんの企画・監修による美術展が『怖い絵展』なのだ。

中野さんは美術評論家ではない。彼女の正式な肩書はドイツ文学者である。西洋の名画を美術の観点から鑑賞するのではなく、背景に秘められた史実を解き明かすことを仕事としているのだ。だから、構図が面白いとか色遣いが美しいといった、風景や静物の絵には興味がない。何らかの史実を語る絵が彼女の研究対象なのだ。詩の世界でいえば、叙情詩ではなく叙事詩を鑑賞の対象とするといってもいいだろう。だから、彼女の語る解説には推理小説を読む面白さがある。

上野に来る前、神戸の美術館では大人気となった。前評判もよく、上野の森美術館でも、連日長蛇の列ができるという。この寒空、美術館に入る前に長く待たされては大変だ。ウェブ情報で色々と研究し、平日の午後三時頃が最も空いていそうだとその感触を得た。また、ひよっとして長く待たなければならぬ場合を考慮して、美術好きの友人、Y女を誘った。

十一月二十日の月曜日、二時半に上野駅でY女と待ち合わせて、美術館に向かう。と、前方に長い行列が見えてきた。まさか！ 当日チケットを買う行列ではないのか。こちらは既に前売り券を買ってきた。まさか！

二枚の前売り券を握りしめて行列に近づいていくと、サンドイッチマンのような係員の示す

掲示板が目に入った。

『入場待ちの最後尾』

現在入場まで八十分』

とある。ガーン！

思わず、Y女と

顔を見合わせた。

「どうする？」

「折角来たのだから、

少し並んでみる？

多少は早くなるかもしれないし……」





昨今の朝晩の冷え込みの所為だろう、上野の森はすっかり色づいていた。この公園は紅葉よりも黄葉が美しい。銀杏の巨木が常緑樹を背景にとろけるような黄色の枝を大きく伸ばしている。

Y女と他愛もない話をしていると一時間が過ぎた。一人ならとつくの昔に引き揚げていただろう。今は、美術館の入口がすぐ前にある。暫く待つと、入場制限が解かれ一群の観客が館内に流れ込む。館内に入っても入口付近の絵画の前はかなりの人だかりができていて、殆んど見えない。Y女を促して奥へと進んだ。私にはどうしてもジックリ観ておきたい絵がある。

『レディ・ジェーン・グレイの処刑』——一八八三年、ドラローシユの作品、この展覧会の目玉である。幸い、出口近くは空いていて、この絵をジックリ観賞することができた。

レディ・ジェーン・グレイとは、イングランド最初の女王だ。が、王位についたのは僅か九日間だった。政争に巻き込まれ、弱冠十六歳で処刑される。その場面を描いたのがドラローシユのこの作品だ。

ジェーン・グレイに処刑を命じたのは、メアリー一世だ。ジェーンが自分より先にイングランド初の女王を宣言したのに腹を立ててロンドン塔に幽閉した後、処刑した。カトリックのメアリー一世はその後も三百人ものプロテスタントを処刑したことから『ブラディ・メアリー』と呼ばれ、ウォッカとトマトジュースを混ぜたカクテルの名前の由来となっている。

目隠しをされたジェーン・グレイは、自らの首を置く台を手探りで探している。ジェーンの右に立つ司祭がその手助けをする。十六世紀中頃には未だギロチンが発明されておらず、ジェーンは台の前に腹這いに寝て自らの首を台の上に差し出すのだ。右側に立っている男は大きな斧をもった処刑執行人。ジェーンが台の上に首を置くのを待っているのだ。この男が腰に差している短剣は、ジェーンの首を叩き切るのに失敗した時にこれを使って切り落とすものだ。首置き台の下に敷かれた藁は滴り落ちる血を吸収する。

左に座る侍女はジェーンのマントや宝石を膝に置き、今にも失神しそうだ。その奥ではもう一人の侍女が背中を見せて泣いている。

中野京子さんは右のような説明をした後、独自の想像力を更に拡げて次のように語る。

「この絵を見るたびにオペラのようなだな、と思います。侍女や処刑人たちがそれぞれ順番にアルトやバスで独唱した後、ジェーン・グレイがソプラノで独唱、歌い終わるとジェーンにだけスポットライトがあたり、さらに暗転、という具合に」

背景にある史実を知り、更に想像を逞しくすると、凍りつくような恐怖がこの一枚の絵から発散されているように感じる。

この作品は発表後、ジェーン・グレイが処刑されたロンドン塔に飾られた。しかし、一九二八年の大洪水で行方不明になっていた。その後、発見されて現在はロンドンのナショナル・ギャラリーの所蔵となっている。

二十世紀の初頭、この絵をロンドン塔で観た日本人がいる。英国留学中の夏目漱石である。漱石は、ロンドン塔を訪問した時の印象をもとに『倫敦塔』という短編小説を書いた。その中で、この絵を観たときの様子を書く。

銃眼のある角を出ると滅茶苦茶に書き綴られた、模様だか文字だか分からない中に、正しき画で、小さく「ジェーン」と書いてある。余は覚えぬその前に立留まった。英国の歴史を読んだものでジェーン・グレイの名を知らぬ者はあるまい。またその薄命と無残の最後に同情の涙を灌がぬ者はあるまい。

(中略)

余はジェーンの名の前に立ち留まったぎり動かない。動かないと云うよりむしろ動けない。空想の幕はすでにあいている。

始めは両方の目が霞んで物が見えなくなる。やがて暗い中の一点にパッと火が点ぜられる。その火が次第次第に大きくなって内に人が動いているような心持ちがする。次にそれがだんだん明るくなって、ちょうど双眼鏡の度を合わせるように判然と眼に映じて来る。次にその景色がだんだん大きくなって遠方から近づいて来る。気がついて見ると真中に若い女が坐っている、右の端には男が立っているようだ。両方共どこかで見たようだなと考えるうち、瞬たくまにズツと近づいて余から五、六間先ではたと停る。男は前に穴倉の裏で歌をうたっていた、眼の凹んだ煤色をした、背の低い奴だ。磨ぎすました斧を左手に突いて腰に八寸ほどの短刀をぶら下げて身構えて立っている。余は覚えさずギョツとする。女は白き手巾で目隠しをして両の手で首を載せる台を探すような風情に見える。首を載せる台は日本の薪割台ぐらいの大きさを前に鉄の環が着いている。台の前部に藁が散らしてあるのは流れる血を防ぐ要領と見えた。背後の壁にもたれて二、三人の女が泣き崩れている、侍女でもあろうか。白い毛裏を折り返した法衣を裾長く引く坊さんが、うつ向いて女の手を台の方角へ導いてやる。女は雪のごとく白い服を着けて、肩にあまる金色の髪を時々雲のように揺らす。ふとその顔を見ると驚いた。眼こそ見えね、眉の形、細き面、なよやかなる頸の辺りに至るまで、さつき見た女そのままである。思わず駆け寄ろうとしたが足が縮んで一步も前へ出る事が出来ぬ。女はようやく首斬り台を探り当てて両の手をかける。唇がむずむずと動く。最前の男の子にダッドレーの紋章を説明した時と寸分違わぬ。

やがて首を少し傾けて「わが夫ギルドフォード・ダッドレーはすでに神の国に行つてか」と聞く。肩を揺りこした一握りの髪が軽くうねりを打つ。坊さんは「知り申さぬ」と答えて「まだ真との道に入りたもう心はなきか」と問う。女吃として「まこととは吾と吾夫の信ずる道をこそ言え。御身達の道は迷いの道、誤りの道よ」と返す。坊さんは何にも言わずにいる。女はやや落ちついた調子で「吾夫が先なら追いつこう、後ならば誘うて行こう。正しき神の国に、正しき道を踏んで行こう」と云い終つて落つるがごとく首を台の上に投げかける。眼の凹んだ、煤色の、背の低い首斬り役が重た氣に斧をエイと取り直す。余のズボンの膝に二、三点の血がほとばしると思つたら、すべての光景が忽然と消え失せた。

漱石は、彼流に想像力を掻き立てて頭の中でドラマを作っているようだが、いかな漱石といえども史実と中野京子の解説の迫力には及ばない。

【二〇一四年十一月記 原稿用紙十枚（写真を除く） 課題「氷」】